



吉田 一夫

「映画監督」

人ありてこそ我あり 草刈り十字軍から 学んだこと

私と森の出会いとは子ども時代です。生まれ育った鳥取の倉吉に打吹山という山がありまして、山頂から海を見ることができ、子ども心に山は楽しいところだと感じました。ただ、大人になってからは森林ということを思い出す機会もなく、団塊の世代として高度成長期の発展の中を生きてきました。

そんな中、『草刈り十字軍』という映画を撮りました。これは現実世界で不可能に挑戦する姿を撮りたい、という動機からでした。

草刈り十字軍とは昭和四九年、造林地から村人が移住した過疎地域で起こった運動です。森で下草を刈る人手がないため空中農業散布が計画されました。同じころ過疎地域を借りて農業を始めた若い人たちがそれに反対し、すべて人の手で作業しようという活動を始めたのです。広大な森林の下草を人の手で刈り取るという活動やその実現にいたる経過が不可能への挑戦そのものでした。

撮影の事前取材に行ったとき、外から見ていては分からないと痛感し仕事を忘れて二週間、ともに草を刈りました。お山の拭き掃除とも呼ぶべき大変な作業で、これは無理だと幾度もへこたれそうにな

りました。しかし参加していた仲間たちに支えられ、ついに刈り終えることができたのです。その時味わったのは何にも代えがたい感動です。

森林ボランティアがすばらしいのは目に見える成果はなくとも次世代に何かを残すことができるという純粹な奉仕精神にあります。日本の文化を育んだ森を大切にす素敵さを子どもたちにも学んで欲しいです。

私は今年還暦を迎えましたが、人生の思い出として三四回目となる草刈り十字軍に再び参加しました。老若男女、六一人が参加しました。体力的に大変でしたが、もう一度仲間とともにあの感動を味わえました。

毎回参加者の文集をつくるのですが、私は「人ありてこそ我あり」と題する文章を寄せました。人とつながり、森を守り、後世へと伝えていく。先人の恩恵を実感し次の世代に何かを残せる。まんざら悪い人生じゃないって思わせてもらえました。

プロフィール 吉田 一夫(よしだ かずお)

昭和22年鳥取県出身。関西学院大学卒業後、アメリカ映画の助監督などを経て、昭和49年、東宝映画演出部に入社。主に小谷承靖、木下恵介、市川崑の各監督の助監督をつとめる。平成元年、劇映画『YAWARA!』で監督デビュー。平成9年、劇映画『草刈り十字軍』の脚本、監督で厚生大臣賞を受賞。

Kazuo Yoshida